
「お前の居場所は俺が決める」脅迫から始まった屈辱の調教、それでも碧い瞳は折れない

【 サンプル版 】

—— STORY ——

碧眼のせいで前の大学を追われた蒼は、新天地で静かに過ごすことを望んでいた。

しかし、水泳部のエース・氷室壱斗に目をつけられ、過去の秘密を握られてしまう。

「俺に逆らうな。それだけ守れば、誰にも言わない」

脅迫から始まる屈辱の日々。

体は次第に開発されていく——それでも、碧い瞳だけは決して折れない。

1

第1話 碧眼の獲物

「編入生の柊です。よろしくお願いします」

「ハーフ？」

「目、青いじゃん」

「きれー」

蒼は前髪を指で整えながら、視線を伏せた。碧眼。母親譲りのこの目が、どれだけ面倒を引き寄せてきたか。前の大学でも、この目のせいで変な噂が立った。結局、居づらくなって編入を選んだ。

二度と同じ失敗は繰り返さない。

席に着こうとしたとき、背筋に冷たいものが走った。

教室の窓際。黒髪短髪の男が、ほおづえをついたままこちらを見ている。奥二重の鋭い目。アスリート特有の広い肩幅。表情は穏やかなのに、獲物を値踏みするような視線を感じた。

氷室壱斗。入学前のオリエンテーションで、その名前は耳にしていた。水泳部のエース、成績優秀、教授陣の覚えもいい。

目が合った。

壱斗の唇が動いた。

「見つけた」

蒼は急いで視線を逸らし、空いている席に座った。

午前の講義中、ずっと視線を感じた。後ろの席から。振り向かなくてもわかる。あの男が見ている。昼休み。蒼は逃げるように学食へ向かった。適当にうどんを頼み、隅の席で食べ始めた。

「隣、いいか」

顔を上げると、壱斗が立っていた。

「……どうぞ」

壱斗は当然のように隣に座った。

「柊、だっけ。どこから編入？」

「……T大です」

「へえ。なんで辞めた？」

「……合わなかったんで」

「そう」

壱斗はそれ以上追及しなかった。だが、その目は笑っていた。何もかも知っているような目。

「お前、その目のせいで苦労してそうだな」

鳩尾に衝撃が走った。

「碧眼。珍しい。目立つだろ」

「……別に」

「前の大学でも、その目のせいで何かあったんじゃないか？」

蒼の顔から血の気が引いた。

「……何が言いたい」

「別に。ただの雑談だよ」

蒼は早々に食事を切り上げ、席を立った。

「また後でな」

背後から声が追いかけてきた。あの男には近づくな。本能がそう告げていた。

放課後。

蒼は足早にキャンパスを出ようとしていた。人通りの多い正門ではなく、裏門から出よう。体育館の裏を通り、人気のない駐輪場の脇を抜ける。

「柊」

背後から声がかかった。振り向く間もなく、腕を掴まれた。引っ張られるまま、体育倉庫の扉が開く。「っ、何を」

背中がマットに押し付けられた。薄暗い倉庫。跳び箱やマットが積み上げられた狭い空間。目の前に壱斗の顔があった。

「逃げようとしたな」

「逃げてない」

「嘘つくな。体育館裏から駐輪場の脇まで、全部見えてた」

壱斗が蒼のあごを掴み、強制的に顔を上げさせた。

「お前の目、気に入った」

「……は？」

「昔、同じ目をした奴がいた。そいつも、最初は強がってた」

壱斗の目が、一瞬だけ遠くを見た。

「でも、結局は――いや、今はいい。お前はお前だ」

蒼は腕を振り払おうともがいたが、壱斗のアスリート体型には敵わなかった。

「離せ」

「いいよ」

壱斗があっさりと手を離した。しかし蒼が逃げようとした瞬間、退路を塞がれる。

「その代わりに、明日にはお前の居場所がなくなってるけど」

壱斗が耳元で囁いた。

「……脅迫か」

「事実を言ってるだけだ」

壱斗の指が蒼のほおに触れた。

「T大で何があったか、知ってる。お前、目のせいでストーカーに付きまといわれたんだろ。それで被害者なのに、なぜか加害者扱いされて退学。誘惑したとか、思わせぶりの態度を取ったとか、そんな噂が広まった」

蒼の顔が強張った。

「……どこでそれを」

「調べれば出てくる。この大学にも、お前の過去を知ってる奴はいる。俺が一言言えば、また同じことが始まる」

「お前……っ」

「俺に逆らうな。それだけ守れば、誰にも言わない」

壱斗の目が、冷たく光った。

「お前の居場所は、俺が決める」

蒼は唇を噛んだ。歯が肉に食い込む。だが、この男の言う通りだった。また同じことが起きたら、もう逃げ場がない。

「……何をさせる気だ」

「そうだな」

壱斗が蒼の肩を押し、マットに背をつけさせた。ポケットから黒いアイマスクを取り出す。

「まず、これをつけろ」

視界が完全に奪われた。

暗闇の中、蒼はマットに背をつけたまま立っていた。服は着たまま。拘束もされていない。ただ、見えないだけ。

それなのに、心臓がうるさい。

埃の匂いがする。マットのゴムの匂い。かすかに漂う壱斗の香水。柑橘系の、爽やかな香り。その下に、運動部特有の汗の匂いが混じっている。男の匂いだ。視覚を奪われただけで、嗅覚が敏感になっている。

「動くな」

壱斗の声が、すぐ近くで聞こえた。しかし、どこにいるのかわからない。

「いい顔してる。怯えてる」

「……怯えてない」

「嘘つくな。心臓の音、聞こえるぞ」

聞こえるわけがない。だが、確かに自分の心臓は暴れていた。

「想像しろ」

「……何を」

「俺の手が、お前の体に触れてる」

触れられていない。わかっている。なのに、首筋がぞわりとした。

「首筋を撫でて。指先で、ゆっくり。耳の下から、鎖骨に向かって降りていく」

壱斗の低い声が、暗闇の中で響く。蒼は唇を噛んだ。馬鹿馬鹿しい。こんな言葉遊びで、何も感じるわけがない。

だが、体は正直だった。首筋に鳥肌が立っている。

「シャツの上から、胸の真ん中を通して、下腹部に降りていく」

蒼の呼吸が浅くなった。見えないから。どこにいるかわからないから。次の瞬間、本当に触れるかもしれない。その恐怖と、まだ触れられていないという安堵が、交互に押し寄せてきた。

「ベルトの上で、止まる。お前のモノに、手を伸ばしてる」

びくり、と下腹部が反応した。

握られていない。触れられてもいない。なのに、ズボンの中で存在感が増していく。

「まだ触ってないのに、もう期待してるのか」

壱斗の声に笑いが混じった。

「っ、違う」

「声が震えてる」

壱斗の声が、今度は耳のすぐ後ろから聞こえた。吐息がかかる。温かい。湿り気を帯びた息が、耳たぶに触れる。

「敏感だな、耳」

「触るな」

「触ってない」

ふう、と息を吹きかけられた。それだけで、背筋を痺れが駆け抜けた。

「っ……ん」

声が漏れた。

「いい反応。今から、俺の指示通りに動け」

「断る」

「じゃあ、出ていけ」

壱斗の声が離れた。足音が遠ざかる。

蒼は動けなかった。出ていけばいい。アイマスクを外して、走って逃げればいい。なのに、足が動かない。

弱みを握られている。だから逃げられない。

だが、それだけじゃない。

体が、この状況に反応してしまっている。

ズボンの中は、すでに窮屈になっていた。半分以上硬くなっている。こんな屈辱的な状況なのに、興奮している。

「動かないってことは、続けたいんだな」

声が、再び近づいてきた。

「……」

「ベルトを外せ。自分で」

蒼の指が、震えながらベルトに触れた。カチャリ、という金属音。

「チャックも」

ジッパーを下ろす。下着越しに、自分の膨らみが手に触れた。もう完全に硬くなっている。

「取り出せ。お前のモノを、外に出せ」

蒼は唇を噛みながら、下着の中に手を入れた。熱を持った自分のものを掴む。持ち上げて、外気に晒す。

冷たい空気が敏感な肌に触れ、思わず息を呑んだ。

「もう硬くなってる。声だけで、こんなになるんだな」

「うるさい」

「怒るなよ。褒めてる」

壱斗の声が、二メートルほど離れた場所から聞こえた。腕を組んで、蒼の体をゆっくりと観察しているのだろう。

薄暗い倉庫の中。アイマスクをしたまま自分のものを握っている姿。屈辱的な格好だ。それなのに、蒼のものはすでに完全に勃起していた。先端は濡れ始め、透明な液が滲み出ている。

「握れ」

蒼の手が動いた。自分のものを包み込む。

「ゆっくり、上下に動かせ」

じゅる、と先走りが擦れる音がする。自分の手なのに、まるで他人に触られているようだった。
見えないから。感覚だけが頼りだから。

「もっとゆっくり」

速度を落とす。焦らすように、根元から先端まで、ゆっくりと撫で上げる。

「先端を親指で押せ」

亀頭の先端に親指を押し当てた。ぬるりとした感触。尿道口を押すと、中から新しい液が押し出されてきた。

「いい子だ」

巷斗の声が、褒めるように響いた。屈辱的なのに、体が反応してしまう。

「もっと強く」

握りが強くなる。

「速く」

しゅこ、しゅこ、しゅこ。規則的な音が響いた。

「あ……っ」

声が漏れた。抑えきれない。

「そのまま続けろ」

もう何も考えられない。快感だけが蓄積していく。

「止まれ」

突然、命令が飛んだ。

手が止まる。蒼は荒い息をついていた。止められた瞬間、物足りなさが全身を駆け抜けた。もう少しで達するところだったのに。

「続けたい？」

「……ああ」

自分でも信じられない返事だった。

「じゃあ、手を離せ」

「は……？」

「手を使わずに動かせ。筋肉を使え」

蒼は半信半疑で、下腹部に意識を集中させた。力を入れる。

ぴくり。

自分のものが、わずかに跳ねた。

「そうだ。もう一度」

繰り返すうちに、コツが掴めてきた。びくん、びくん、と脈打つように上下する。

「あ……っ」

声が漏れた。手で触れているより弱い刺激なのに、集中している分だけ感覚が鋭敏になっている

。

「いい声だ。もっと聞かせろ」

「っ、うるさ……あっ」

自分のものが、大きく跳ね上がった。それだけで、熱い波が背中を駆け上がった。

「このまま出せ」

「……無理だ」

「出せ」

壱斗の声が、命令の響きを帯びた。

「想像しろ。俺の手が、お前のモノを握ってる。強く、速く、扱ってる」

想像の中で、手が動く。実際には誰も触れていないのに、感覚がリアルに再現される。

「あ、っ……」

「俺の指が、先端を撫でて。敏感な先端を、ぐりぐり押し付けてる」

その感覚が、実際に再現された。触れられていないのに、亀頭が焼けるように熱い。

「裏筋を、下から上にゆっくり舐め上げてる」

「やめ……っ」

「やめない。溜まってるんだろ。出したいんだろ」

その通りだった。下腹部がはち切れそうに熱い。

「出していいぞ」

許可を与えられた瞬間、蒼の中で何かが弾けた。

「あっ、あああっ……！」

一度も触れられていないのに、下腹部から熱い波が押し寄せてきた。全身が痙攣する。

びゆる、と精液が放物線を描いて飛んだ。一度目。二度目。三度目。どくどくと脈打ちながら、白濁した液が溢れ続ける。

「っ、は……あ……はあ……」

力が抜けた。ずるずると座り込む。

アイマスクが外された。目の前に壱斗の顔があった。

「声だけで出したな」

壱斗が蒼のあごを持ち上げ、覗き込む。涙で滲んだ碧眼が、壱斗を睨み返した。

「お前の体、想像以上にいい反応する」

「……くそ」

蒼は唇を噛んだ。血の味がした。この男の声だけで、こんなにも簡単に。

だが、それでも目は逸らさなかった。碧眼は、まだ折れていない。

「そうやって睨んでろ。その目が折れるまで、俺は何度でもお前を追い込む」

壱斗が立ち上がった。

「明日からが本番だ」

扉が閉まった。蒼は床に座り込んだまま、自分の手を見た。震えている。

唇を噛んだ。爪が掌に食い込む。

蒼は拳を握りしめた。

絶対に、屈してたまるか。

だが、この男から逃げる方法は、まだ見つからなかった。

— サンプル版はここまで —

続きは製品版でお楽しみください